

ザボロツキーのアイロニーとグロテスク

——詩人の創作前半期——

伊藤友計

1

ザボロツキー（ニコライ・アレクセエヴィチ，1903-1958）は死の直前に残した「文学上の遺言状」（1958年10月6日の日付が残されている）という文章の中で，自らの文学活動を二期に分けている。第一期は詩集『詩柱』と叙事詩に代表される1926年から33年まで。第二期は1932年から58年まで。以下の本論ではこの第一期に焦点を当ててザボロツキーの詩作を検討したいと思う。その前に，簡単に詩人の第二次大戦期までの歩みを振り返る。

2

1903年4月24日（新暦5月7日），カザンに生まれる。父は農学者。1910年，一家はヴャトカ県ウルジュム郡セルヌル村に移住。ウルジュム時代からすでに詩作をはじめ。1920年モスクワ大学文学部，また同時に医学部に入学。一年後，ペトログラードに向かい，ゲルツェン教育大学ロシア語ロシア文学学部に入學。1925年卒業。1926年から27年まで軍役に勤務。その勤務後，ハルムス，ヴヴェジェンスキー，オレイニコフらとオベリウを結成。1928年に出されたオベリウの宣言文のうち，「オベリウの社会的特性（Общественное лицо Обэриу）」と「オベリウの詩学（Поэзия Обериутов）」はザボロツキーの手になるものである。同年，児童文学散文集『ハリネズミ（Еж）』を出版。1929年，詩集『詩柱（Столбцы）』を出版。これが公的批評の否定的な見解を生み出す。1929年2月，『農業の勝利（Торжество земледелия）』の執筆に着手。

ヴヴェジェンスキーとの不和等が原因となり，オベリウとの関係は次第に希薄になる。1931年ツイオルコフスキーと書簡が交わされる。特に1929年から33年にかけては詩人の自然哲学が実り豊かに発展した時期である。1932年，『詩集1926～1932』の出版を計画（この計画は頓挫）。1933年『ズヴェズダー』誌第2・3号に『十二宮がかすんでいく（Меркнут знаки Зодиака ...）』，『ロデイニコフ（Лодейников）』，『農業の勝利』が掲載される。これが新たな批判の契機となる。1935年，Т.タビッセ，Г.レオニーゼらとの親交が契機となり，グルジア文化への興味が生まれ，グルジア詩のロシア語への翻訳をはじめ。1937年，詩集『第二の本（Вторая книга）』出版。1938年『イーゴリ軍記』の現代語訳に着手。

1938年3月19日逮捕。5年間の禁固の判決。極東へ追放。1944年8月18日、禁固が解かれるが、志願して収容所での軍役につく。1945年、カラガンダに移され、当地で『イゴリ軍記』の現代語訳を完成させる。1946年1月、モスクワに移る。

3

КРАСНАЯ БАВАРИЯ

クラスナヤ・バヴァリア

В глуши бутылочного рая,
Где пальмы высохли давно,—
Под электричеством играя,
В бокале плавало окно;
Оно на лопастях блестело,
Потом садилось, тяжелело;
Над ним пивной дымок вился ...
Но это описать нельзя.

И в том бутылочном раю
Сирены дрогли на краю
Кривой эстрады. На поруки
Им были отданы глаза.
Они простерли к небесам
Эмалированные руки
И ели бутерброд от скуки.

Вертятся двери на цепочках,
Спадает с лестницы народ,
Трещит картонною сорочкой,
С бутылкой водит хоровод;
Сирена бледная за стойкой
Гостей попотчует настойкой,
Скосит глаза, уйдет, придет,
Потом, с гитарой наотлет,
Она поет, поет о милом:
Как милого она кормила,

ガラス瓶の樂園の茂みの中、
久しく椰子の木が枯れてしまった場所で——
電気照明のもと揺らめきながら、
ワイングラスに窓がただよう；
窓はグラスの端で輝き、
そして腰を落ち着け、重みを増した；
その上をビールの煙が立ち上った…
しかしこれを描くことは不可能だ。

さらにそのガラス瓶の樂園の中、
ゆがんだ舞台の端で
サイレン達が身を震わせた。請け合いに
彼女らには目が渡された。
天に向かって彼女らは
エナメル塗りの手を伸ばし、
退屈しのぎにサンドイッチを食べていた。

ドアが鎖状に回転し、
群集が階段づたいに下へ降り、
ボール紙のシャツをかきつかせ、
ガラス瓶を手に輪舞を踊る；
青白いサイレンがスタンドの向こうで
客に果実酒を振舞い、
視線を傾けては、行きつ戻りつ、
その後、ギター片手に脇へそれ、
彼女は歌う、恋人の歌を：
いかに自分が恋人に食事を作り、

Как ласков к телу и жесток —
Впивался шелковый шнурок,
Как по стаканам висла виски,
Как, из разбитого виска
Измученную грудь обрызгав,
Он вдруг упал. Была тоска,
И все, о чем она ни пела, —
В бокале отливало милом.

Мужчины тоже все кричали,
Они качались по столам,
по потолкам они качали
бедлам с цветами пополам;
один — язык себе откусит,
другой кричит: я — иисусик,
молитесь мне — я на кресте,
под мышкой гвозди и везде ...
К нему сирена подходила,
и вот, колено оседлав,
бокалов бешеный конклав
зажегся как паникадило.

Глаза упали точно гири,
Бокал разбили — вышла ночь,
И жирные автомобили,
Схватив под мышки Пикадилли,
Легко откатывали прочь.
Росли томаты из прохлады,
И вот опущенные вниз —
Краснобаварские закаты
В пивные днища улеглись,
А за окном — в глуши времен
Блистал на мачте ламп.

いかに心地よくまたこわばって——
絹の編み紐が身体に巻きつくか、
いかにウイスキーのコップに自分が垂れ下がり、
いかに、砕けたこめかみから
くたくたの胸に浴びせかけ、
彼が突然倒れたか。そこにあるのは憂鬱、
そして彼女が歌うものはその全てが、——
グラスに白亜色に見えた。

男たちも皆が大声を上げ、
テーブルからテーブルへと足をふらつかせ、
天井と天井の間で花束と大騒ぎを
半々に振り回す；
ある者は——自分の舌を噛み、
ある者はこう叫ぶ：俺はキリスト様だ、
われに祈りたまえ——われは十字架に磔られ、
脇の下、またいたるところ釘だらけだ…
彼にサイレンが歩み寄り、
そしてそこで、ひざに鞍をつけ、
ワイングラスたちの狂乱した法王選挙会が
教会のシャンデリアのように輝き始めた。

眼はまさに分銅のように落下し、
グラスは粉々に砕かれた——夜は立ち去り、
脂ぎった自動車が、
脇の下にピカデリーを抱え込み、
軽々と転がり去っていく。
涼気からトマトが育ち、
下へと頭をたれて——
クラスナヤ・バヴァリアの朝焼けが
ビアホールの底に横たわった。
窓の外——時の茂みで
柱上のイルミネーションランプが輝いていた。

Там Невский в блеске и тоске,
В ночи переменявший кожу,
Гудками сонными воспет,
Над баром вывеску тревожил;
И под свистками Германдады,
Через туман, толпу, бензин,
Над башней рвался шар крылатый
И имя «Зингер» возносил.

Авг. 1926

(1.340,341)

そこでは夜に肌を取り替えた
輝きと憂鬱のネフスキー大通りが
寝ぼけまなこのクラクションに賛美され
ビアホールの看板をじらす。
そしてゲルマンダダの笛の音のもと
もやと人ごみとガソリンを突き抜け、
塔の上に翼のついた球^{たま}が駆け上がり
『ジンガー』の名が高々と揚がった。

Красная Бавария……20年代のレニングラードに実在したビール酒場。

Пикаделли……ネフスキー大通りの映画館の古い名称（現在の「アヴローラ」）。

Германдада……自らの権利擁護の闘争のため、中世にスペインの諸都市によって結ばれた同盟。ここでは強大な都市の比喩。

«Зингер»……ミシン製造会社。この会社の名称がグリボエードフ運河とネフスキー大通りの角にあった建物（現ドム・クニーギ）の丸屋根の上の地球儀に書かれていた。¹

この作品は1929年の詩集『詩柱』²のオープニングを飾る詩である。全体的なことからはじめよう。リズムは4脚ヤンプで書かれ、連分けも押韻も認められる。形式的なことからいえばザボロツキーはロシア詩の伝統に連なっている。登場するいくつかの言葉を拾ってみると、「枯れた椰子の木」「退屈」「憂鬱」、また4連目で酔っ払いが上げる叫び声からなど、読者はどちらかといえば暗く、重苦しい印象を受けるはずだ。

詩の冒頭に戻る。いきなり第一行目で詩人は3つの言葉を互いにつけている。まず、「ガラス瓶」と「楽園」。前者が俗世界を象徴する代表例だとすれば、後者との組み合わせは

¹ 以上の注は以下の出典の当該箇所から幾つかを選択の上訳出した。Заболоцкий Н.А. Огонь, мерцающий в сосуде... С. 179

² この詩集の題名“Столбцы”であるが、紙にかかれたロシア語の詩は柱状をしていることに由来する。ここでは“столбец”は“колонка”と同義である。ゆえに、この場合、複数形の“столбцы”は“стихотворения”（詩集）と同じことになる。ここから『詩柱』と訳した。しかしこれは便宜であって、“Столбцы”という言葉自体からくる連想を全て否定するつもりはない。例えば、「いく人かの研究者たち [...] は“Столбцы”という用語にザボロツキーは自分の初期詩のジャンルの特別な意味合いを込めたと考えている」(Ростовцева. 20)という指摘には耳を傾けるべきである。また、Prattは“Столбец”には「柱 (Column)」と「巻物 (Scroll)」の意味が含まれていることを踏まえ、ゲーテ、フロレンスキーなどとの関連等からさまざまな解釈を引き出している (Pratt. 111)。

余りにも皮肉である。それでは、その「ガラス瓶の樂園」の「茂み」とは一体何か。その「茂み」の様子を詩人は以下、言葉で詳細に摘み取っていく。その様子も詩人は「グラス」に映る「窓」に託す。そこに映る姿はいわゆる写真的な正確さを誇るものではなく、「歪み」であり、「ひん曲がった」世界である。この描写が思いがけない、しかしまた同時に周到に用意された次の一文で中断される：「しかしこれを書くことは不可能だ」。

第二連目。描写は酒場の歌手たち（「サイレンたち」）に移る。彼女たちの手が電気照明にくゆられ、「エナメル」色に映えるというのはいかにも即物的で、かつ 20 年代の状況をよく表しているといえよう。その手が口にサンドイッチを運ぶのは「退屈しのぎ」から、というのも詩全体の雰囲気をもより皮肉に、重々しくしている。またさらには、サンドイッチをかじるサイレンたちは複数で（ели），食べられるサンドイッチの方は単数であること（бутерброд）にも注意を払いたい。

第三連目に入っても、細かい場面描写の筆づかいは変わらないが、ここから詩は次第に激しい動きを見せ始める。客たち（“народ”）が酒場に入ってきて、サイレンは彼らに給仕しながら、ついにはギターを手にして歌を歌い始める。その歌の内容もいかにもやるせなく、憂鬱である。

この傾向は第四連の「大騒ぎ」と酔っ払いの男の叫びで増幅される。酒場の混迷は更に激化の様相を強める。「大騒ぎと花束を半々に（бедлам с цветами пополам）」という意外な語結合も視覚効果のみならず、酒場全体の混乱ぶりをよく表している。ここでは音声面にも注目しよう。「この〔混乱の：伊藤〕増幅は絶妙な音による描写表現の手法によってもことさらに強調されている。この手法は内的母音反復法、また時には正確な内的押韻法、音的同調・反復の連鎖の上に構成されている。“Кричали... качались... столам... потолкам... качали... бедлам... цветами... пополам”唇をぺちやつかせ、泣きわめき、執拗に繰り返される韻 ча, ам が（子音 к,ч,л,м,т の戯れと結合して）音によって酒場の大騒ぎを描写している」（Македонов. 58,59）。また、まさにこの場面で「法王選挙会（конклав）」「教会のシャンデリア（паникадило）」という、言わば仰々しい高尚な言葉が使われているのも、皮肉という他ない。

第五連。酒場の大騒ぎは終わり、グラスは砕け散り、夜が静かに開けんとする。その反面、詩人のアイロニカルな描写は更に強まる。「脂ぎった自動車」と映画館「ピカデリー」。どちらも、特に後者の名称にはネップ時代の刻印がはっきりと示されている。ネップマンたちが酒場からピカデリー脇を去って行くと、場面は落ち着いた様子を見せ始める。酒場の外に出て、視界に入ってくるのは、「朝焼け」、「酒場の底」、「柱上のイルミネーションランプ」。しかしこの光景は寒々しい（「冷氣」の「トマト」）。また、「時の茂み」は「ガラス瓶の樂園の茂み」と明らかに呼応していることに注目しよう。

最終連で眼前に立ち現れるのは、「輝きと憂鬱のネフスキー大通り」である。夜が明け、

一日の始まりを知らせるクラクションが鳴り、酒場の内部とは異なった爽やかさまで感じさせるこの結末部も、結局は「ジンガー」という（ネップ時代に実在した）広告塔によって幕が閉じられる。

『詩柱』には全 22 の詩が含まれ、1929 年当時には発行部数は 1200 部に過ぎなかった。これに対して Д.リハチョフらが好意的な反応を示したものの、それらの好評はすぐに激しい批判の波にかき消された。その批判の趣旨を手短にまとめるなら、ザボロツキーが「アイロニカルで、現体制に否定的なパロディーを書く、風刺詩人である」ということに要約されよう。上で見たように、確かにザボロツキーは現前の現実を肯定的に書こうとしていない。20 年代のレニングラードに詩人が抱いていた感情は、心底からの共感とは決していえない。この感覚は『詩柱』を貫いており、それを詩人は一種異様な姿で捉え、表現している。『詩柱』の一連の作品が「グロテスクもの」と呼びなわされる所以である。ここからすれば当時の批判が全く見当違いのものであったわけではないことがわかる。アイロニーや風刺の要素は疑いなくここにある。

しかし、詩人の詩作の目的が風刺やパロディーを書くことにあったか、となるとここは事情が異なる。ギンズブルグがいみじくも自らの言葉で言い直しているように、「対象を裸の目で見るように」(Гинзбург. 478)と強く主張していたのはザボロツキー自身ではなかったか。「Н.ザボロツキー——見る者の眼前にまで突きつけられた、裸の具体的形状の詩人。彼の詩を読み、聴くのは、耳でというよりも、目や指でなければならない」(1.524)。この簡潔な自己紹介からも分かるように彼はまず何よりも視覚の詩人である。

このことを他のテキストからも裏付けよう。1921~22 年にかけてザボロツキーによって執筆された「シンボリズムの本質について」と題された論文がある。ザボロツキーはこの論文をこうはじめる。「詩人は、まず第一に、観照者である」(1.515)。それゆえ問題は、現実の観照の仕方に関わってくる。ここで著者は、主体なくしていかなる認識もありえないことを強調する。「認識は、認識者、主体なくしては不可能なままであるから、認識者の主観的特性を帯びていることになる。」(1.516)それゆえに人間の認識における相違は、体験されるものの方ではなくて、体験の仕方そのものに存すると考えるべきである。すると創作の方向性は知覚の質と特性に依存していることになる。ここにおいてザボロツキーは以下 2 つの違いを明らかにする。

詩において現実主義者が素朴な観察者であるのに対し、シンボリストはいつでも思惟者である。街頭のありさまを眺めながら、現実主義者は個々の姿を見、それを目に見える明確な簡素さで体験する。

[...] 街路。古いぼれの老人が慈悲を求めている。[...] まがい物の宝石をきらつかせながら、

厚化粧の女が通り過ぎていく。

シンボリストは、現実の明瞭な簡潔さを体験しながら、思惟深く、創造的に、その隠された意味、隠された抽象性に入り込んでいく。

いや違う。あれは乞食でも、陽気なたまり場の女でもない。あれは貧困であり、淫蕩だ。あれは——巨大都市の子供達であり、あれはコンクリートの抱擁の死だ。(1.516)

『クラスナヤ・バヴァリヤ』の記述から明らかなおおり、ザボロツキーはシンボリストでは決していない。彼が依拠しているのは前者の現実主義者の路線である。

また以下のザボロツキー自身の言葉は、特に『クラスナヤ・バヴァリア』を読むときまさに当を得ている。

私が書くもの、それはパロディーではなく、私の視覚です。しかもこれは私のペテルブルグ、つまり私たちの世代のレニングラードなのです。(Антокольский. 138)

視る詩人・ザボロツキーにとって、例えば『クラスナヤ・バヴァリア』で展開されたレニングラードのグロテスクは、幼少時代を農学者の父の影響下で育ち、自然に慣れ親しんだ者の目に映った都市の姿そのものではなかったか。あるいは、言葉を変えれば、「ザボロツキーはネップ時代の生活様式の厳密な解剖をしている」(Урбан. 864) わけだ。この解剖を可能にしたのは、詩人の対象把握の即物性・具体性¹であった。彼が描いたのは、まず第一に、自身の目に映った20年代ネフスキー大通りの言葉による風俗画だった。²

¹ この詩人の特質は、ある意味でシンボリストに対するアンチテーゼと受け取ることができよう。この点、論文「シンボリストの本質について」からの上の引用が今一度興味深いのは、そこでの現実主義者とシンボリストとの対比が、Prattの着眼する次の比較と重なり、彼女の言葉の妥当性が確認できるからである。「彼[ザボロツキー]は酒場での啓示に関するブロークの有名な詩、『見知らぬ女』に対して、自らの『クラスナヤ・バヴァリア』をいわば競わせることによって、詩的醜態というコンテクストの挑戦をブロークに挑んだ」。その挑戦の場は、「存在論」、「認識論」の領域である。とPrattは述べている(Pratt. 118,119)。

² 以上のことからもう一つ興味深い論点を引き出せる。それは詩人の「抒情性」に関することである。「彼[ザボロツキー]の詩は「抒情的」ではない：実際ザボロツキーは、自らのキャリアを叙事詩的性格の作品からはじめ、そして次第に抒情に、自らの抒情的「私」の解放に移って行った、数少ない詩人達の一人である。」(Ростовцева. 24) 同様の点をギンズブルグは次のように述べている。「ザボロツキーはまさに滑稽詩において公然とかつ直裁に一人称から話すことが可能だと考えていた。当時の[20年代の]真剣な詩においては作者の「私」は隠されている。この「私」はただ抒情的意識として、外界との関係としてそこに居合わせている。これもまた、明らかに、「大昔の文化」からの解放、その文化の持ち主、つまり考えられうるあらゆる抒情的人物からの解放、また概して作者の意識のありふれた表現形態からの解放の方法であった。」(Гинзбург. 484)

『詩柱』の発表と時を同じくするころ、ザボロツキーは後に『農業の勝利』と名づけられることになる作品の執筆に取り掛かった。その動機を1936年に詩人自身がこう説明している。

1929年、この農業集団化の最初期に、私は自らの最初の大作を書くことを決意し、それを当時私の周りで生じていた諸事件に捧げることにした。[中略]

自然の搾取者である人間が、自然の組織者になるべき時が熟した。[…]私の前に自然の再建の壮大な展望が開けた。そして私にとってこの展望の鍵となったのは農村の集団化であり、富農階層の撲滅であり、農地の集団的利用と農業の高次の形態への移行だった。これが自らの叙事詩で私の書きたかったことである。(1,610)

確かにこの作品はザボロツキーの最初の大作叙事詩と位置付けることができる。その内容もユニークである。プロローグと7つの章からなり、登場人物も奇抜である。農民、耕作者、兵士、祖先たちといった人間(の亡霊)達だけではなく、彼らとの哲学談義に雄牛、馬、牝牛も参加する。脇役として大地と夜も姿を現し、トラクター運転手が犁と会話を交わす。

実際この作品で展開されているのは、詩人の自然哲学である。詩人と自然との密な関係は幼少の生い立ちから察するに難しくなく、またそれが後にツィオルコフスキーをはじめとするロシア思想家達への傾倒の素地をなしたのであろう。ここではその詳細な検討は目的ではないので、次の言葉でザボロツキーの自然哲学における影響関係を確認するにとどめたい。

我々に広く知られている文学的源泉から、詩人が自らの思想を養った人物を挙げるならばこうなる。プラトンの著作、ダーウィンとエンゲルス、ゲーテとフレイブニコフ、Гр.スコヴォロダとチミリャーゼフ、ヴェルナツキーとツィオルコフスキー。しかしこの列挙も、もちろん、十全なものとは言いがたい。(Заболоцкий Н.Н. 187)

話を『農業の勝利』だけに限ってみても、例えばメイジン＝デリックが論文「ザボロツキーの『農業の勝利』：風刺かユートピアか？」で検討しているように、H.フョードロフの「共同事業の哲学」の思想が影響を与えていることもまた確かであろう¹。以下しばらく、順を追って『農業の勝利』の概略をみる。

¹ 彼女は結論部でこう主張している。「『農業の勝利』は共同事業の哲学と、その一部をなすとおもわれた農業集団化の賛美を提示している」(Masing-Delic. 376)

プロローグ。農村の様子が描写され、そこで猛威を振るうのは盲目の自然の力である（「ここでは恐ろしいまでに荒々しい無秩序で | 自然全体が乱雑に散らかっている」）。

第一章。「魂についての会話」。農民たち、老人、牧夫、老婆、兵士が登場する。彼らは靈魂の存在の有無について討論する。兵士以外はその存在を肯定するが、兵士は科学的知識によって彼らを論破する。

第二章。「動物の苦悩」。夜。自然に苦しめられている動物たち（「動物たちの窮屈な群れが | ふくれた身体を伸ばして | 陰気で愚劣に腰をおろした」）。彼らはそれぞれ自分達の思いのたけをぶつける（馬：「人間よ！首に首輪をはめさせて | 杖で私を叩いておいて | 私が考えることが出来ないと | 思っているのなら何と無駄なことか」「開けてくれ、友よ。 | 全ての人間が我々の統治者だというのは果たして本当か？」）。

第三章。「追放者」¹。夜。富農の世界が描かれる（「富農、この小作人の君主は | 富に賛美されて座る | そして彼の自己中心的世界は | 数多の雲の頭上にあつた」）。その世界が嵐や洪水によって滅ぼされることが予告される。兵士の到来と共に富農は姿を消す（「そして兵士の声と | ドアのきしむ音が聞こえ、一時間後 | 一つの罪深い姿が | 我々から去っていった」）。

第四章。「祖先との戦い」。夜。兵士と先祖たちの会話体。彼らはお互いにののしりあう（先祖たち：「お前だけが、理知の子よ | 生まれながらに不健康なのだ」。兵士：「あなた方の愚鈍さときたら | ひどすぎる！死より性質が悪い」）。兵士は現状に疑問を投げかける（兵士：「もしも産み落とすだけなら | 我々には後戻りなのではないか？」）

第五章。「学問の始まり」。明け方。兵士は自分の見た夢を動物たちに聞かせる（兵士：「ろばは山々をさすらい | 鑄鉄のジャガイモをかじり | 山のふもとで機械仕掛けの教会が | 酸素のタブレットを製造していた。 | そこでは馬、化学の友が | 百の分子からできたスープをすすり | また他の馬は、宙に浮いたまま | 惑星から来た者を見ていた。 | 雌牛は公式とテープの中で | 元素からケーキを焼き上げ | その雌牛の眼前の缶の中で | 大きな化学えん麦が育っていた。」）²。動物たちは兵士の話を冷笑する（馬：「100年犁で汗水たらしておいて | 突然化学だとさ！ハッハッ！」）

第六章。「赤子の世界」。トラクター運転手が農民たちに古い農業技術を捨て去るよう説く。犁は強く反対するが、トラクター運転手は新世界を設立を宣言する。犁は息を引き取

¹ 富農階級に対し、この時期に、「追放者」という、わずかなりとも同情の余地を残す命名をしたのもまづかった。実際編集の際に、即座に「敵」に章名が代えられている(Заболоцкий Н.Н. 213)。

² ニキータ・ザボロツキーは、特にこの部分をヴェルナツキーの思想の具体化だと指摘している(Заболоцкий Н.Н. 192)

る。

第七章。「農業の勝利」。朝の到来。別世界が開ける。老人は犬に哲学を説き、ロバは完全な知性を手に入れ、農民たちは長い新聞を読む。兵士は学問の成果を高らかに賛美し、彼に対して賛同のどよめきが挙がる。

6

前述のように、『ズヴェズダー』誌に他二編と共に『農業の勝利』が掲載されたことが批評家達の新たな攻撃の引き金となった。その歴史的背景をニキータ・ザボロツキーは次のように説明する。

ザボロツキーの作品はいつもなぜか時期にそぐわない。ひどい飢餓が村々を徘徊し、組織されたばかりのコルホーズは崩壊に瀕していた。そこに突然、権力側からしてみれば愚弄的な題名の『農業の勝利』が活字にされ、そこでは全く新しく、プロレタリアートには理解不能の農業の改革という目的が唱導されているわけである。(Заболоцкий Н.Н. 213)

詩人に対する批判を時間を追って概観してみよう。もっとも早い批判で注目に値するのは1929年『立哨中』誌第15号に載せられたA.セリヴァノフスキーの次の言葉である。「果たして、誰の名においてザボロツキーは瘋癲行者の役を演じているのであろうか。[...]この道化は社会主義の現実を愚弄しているのである。」(Pratt. 108)

『農業の勝利』発表後は、まず1933年7月21日付の『プラウダ』紙に掲載されたB.エルミロフの論文「瘋癲の詩学と数百万人の詩学」がザボロツキーを扱っている。著者はそこで、『農業の勝利』は「農業集団化に対するごく平凡な誹謗文である」と述べている(Заболоцкий Н.Н. 215)。

その後は8月30日付同紙のC.ローゼンターリの論文「古きペテルブルグの陰」(この題名で著者は革命前の古きペテルブルグの文学的・芸術的伝統のことをほのめかしている)が続く。そこにはこうある。「瘋癲するザボロツキーの詩学は、明白な富農階級の性格を有している。」(Заболоцкий Н.Н. 215)¹

こうした反応の一因を詩人自身がこう説明している。

¹ ここに頻出する「瘋癲(行者)」という言葉について留保をつけねばなるまい。例えばトロツキーも『文学と革命』においてローザノフを扱っている箇所での「瘋癲行者」という言葉を用いて辛らつな批評を展開している(岩波文庫の同書 p.61 参照)。このローザノフ批判においては「瘋癲行者」に宗教的意味合いも込められていることは理解できるが、ザボロツキー批判ではこの側面はほとんど感じられない。ここでは宗教色は排除され、「理解不能の奇行者」ほどの、詩人批判に便利な言葉として多用されたものと推測する。

私は今こう理解しているのだが、現実の要素とユートピア的要素を一つにまとめた、この叙事詩の構想自体が既によくなかった。結果としてユートピア的要素が私の叙事詩ではあらゆる現実の均整を壊してしまい、そのため部分的に、階級闘争の形象がいくぶんかうやむやになってしまった。実生活における真実を正當に評価しなかったことが、叙事詩を牧歌調、田園調に導き、それは現実とは相容れないものだった。まさにそれゆえに、読者、あるいは少なくとも読者の一部は、この叙事詩を何か皮肉で、パロディー的なプランとして受け取ったのである。この受け取り方を促進したのが当時まだ根が残っていたフォルマリシト的な詩作の手法であった。(1.611)

7

ここで一つの論文に注目したい。E.ウシエヴィチの「瘋癲の仮面の下で」(『文学批評』1933年第4号)である。この論文に注目するわけは、ここで展開されている批判がありきたりな政治的攻撃に終始せず、ある意味でザボロツキー自身さえも意識できなかったかもしれない、詩人の本質を暴いてしまったからだ。

この論文でウシエヴィチはいくつかの観点から『ズヴェズダー』誌に掲載されたザボロツキーの詩三篇を扱っている。ここで注目したいのは、この論文の主な論点である以下の点である。上記三篇の詩は共に来るべき未来の人間の理性(あるいは社会主義)による自然(あるいは立ち遅れた旧世界)の变革をテーマとしている。特にこの点、『農業の勝利』で重要な役割を果たすのは、革命を先導する(勿論赤軍所属であろう)兵士である。しかし、ウシエビッチが言うには、これらの詩作の描写にはいわば「温度差」が見て取れる。つまり同時代のプロレタリアートに関する記述と、そうでない部分とでは叙述の質が異なる、と彼女は主張している。まず前者について具体例を挙げながら見ていこう(以下、詩の引用、その中の強調は全てウシエヴィチによる)。

1) 「子供っぽさ」と「体裁の悪さ」

Пролог	プロローグ
<...>	[...]
Тут природа вся <i>валялась</i>	そこでは恐ろしいまでの野蛮な無秩序で
В страшно диком беспорядке:	自然全体が乱雑に散らかっている。
<...>	[...]
<...>на небе тихом,	[...] 穏やかな空には
безобразный и большой,	不恰好な大きいツルが
журавель летает, с гиком,	喚声を上げ、頭を揺らしながら、
потрясая головой.	飛んでいる。

Из клюва развевался свисток,
Где было сказано: «Убыток
Дают трехпольные труды».
Мужик гладил конец бороды.

(1.117)

くちばしからは巻物がひるがえり、
そこにはこうある。『損失を
もたらすのは三圃式農業』。
男がひげの先をなでつけていた。

『農業の勝利』冒頭のプロローグで、詩人は自然のカオス的狀況をこう表現する。まず前半部分に注目しよう。

さて『農業の勝利』のプロローグで詩人は自然の脅威なカオスの描写をはじめめる。ザボロツキーの作品においてカオス的・アナーキー的ブルジョア資本主義社会の人間の間による搾取の抑圧は、自然の抑圧によって取って代わられる。(Усиевич. 28)

つまりは、ブルジョアによるプロレタリアート抑圧の構図が、自然による人間への抑圧として描写されている、と彼女は考えている。この点を踏まえて上で、この描写の問題点はこう説明されている。

これは明らかに子供じみたフレーズの作り方である。「恐ろしいまでに野蛮な」と「乱雑に散らかる」という言葉が自然に適用されているのは、一見して、恐怖を引き起こすべきであるがまた同時に、まさに笑いを生じさせることを目論んでのことである。(Там же)

またプロローグの最終部分（「損失を…」の巻物をひらめかせるツル）についてはこう述べる。

この思いがけないプロローグの結末はまさしくその意外性と故意のナンセンスのために、明確な中傷的性格を帯びている。](Усиевич. 35)

確かにこれら「子供じみた」語結合、グロテスクな描写には人為的な意図がはっきりしており、明らかに不自然だ。ここから感じられるのは詩人特有のアイロニーである。このアイロニーがプロレタリア階級が現に直面している現実に適用されていることに注意を払う必要がある。

次に注目するのは第一章の、農民たちとの魂に関する議論における兵士の発言である。

Вы знаете, я был на поле брани,

ご存知でしょうか、私は戦の庭にいて、

Носился, лих, под пули пенье.
Теперь же я скажу иначе,
Предмета нашего *касясь*:
Частицы фосфора маячат,
Из могилы *испаряясь*.
Влекомый воздуха теченьем,
Столбик фосфора *несется*
Повсюду, но, за исключением
Того случая, когда о твердое разобьется.
Видите, как все это просто!

(1.120,121)

駆け回ってました、勇ましく、弾丸の歌の下。
さてそれでは、私たちのテーマに触れながら
違う風に言ってみましょう。
リンの粒子が、墓から蒸気しながら、
遠くに見えます。
空気の流れにひきつけられて、
リンの柱が広がっていきます。
いたるところに。ただし、固いものに
ぶつかった場合を例外とすればですが。
どうです、いたって簡単でしょう！

2) 韻律の破壊

引用箇所脚韻に注目しよう。ここでは、かろうじてヤンプのリズムが保たれようとしている。2, 3 行目は完全に四脚ヤンプであり、かろうじてそのリズムが惰性として残っている（6 行目をのぞいて偶数音節目にアクセントの傾向を指摘できる）。ここで着目すべきは、音節数が 8~10 に収まっていることであり、これが一つの音的流れを作っている。しかしここで、問題の 11 行目が読みの流れを断ち切る。突然音節数が 15 に増え、そしてまた 12 行目でまた 9 に戻る。この突然変異をウシエヴィチは、この詩作の「パロディー性」が「全く明確に方向性付けられた韻律の破壊」によってさらに強調されている、と指摘する(Усиевич. 37)。この突然の音節の増加の手法が特にパロディー作品で用いられていることを、И.И.Ирф・Е.Петроフの詩の実例等を挙げて傍証としている(Там же)。

3) 月並みな押韻

同様の点が今度は押韻からも指摘されている。上記引用で強調されている 2 組の韻（*касясь—испаряясь, несется—разобьется*）をウシケヴィチは「これ見よがしなまでに月並みな動詞による韻」と言い、これが「ザボロツキーがあたかも自分の名で社会主義を賞賛している箇所」で用いられている、と述べる(Усиевич. 46)。

上述のように、ここは農民と兵士とが魂について議論している場面である。農民たちが古い価値観の代表だとすれば、兵士はそれを打破する革命のヒーローと、一読では理解されるはずだ。しかし上記の裏づけから、ウシエヴィチはそれは見せかけだと主張する。

農民たちは滑稽で純朴である。それに対して、この叙事詩で農民との会話において物質主義を説く兵士は、全く愚かである。(Усиевич. 36)

この傾向はこの作品の冒頭から第六章まで続く。その章でトラクター運転手は新世界を賞賛するが、その「同じことをくどくどと論ずるトラクター運転手の発言」にウシエヴィチは疑念を呈している(Усиевич. 47)。

以上三点をまとめるとこうなる。描写が「何かしら同時代の世界観や現実認識に関わる時」における「彼 [ザボロツキー] の韻律の破壊、瘋癲行者のような子供じみた. あるいはことさらに不体裁な言い回しや語結合の意味や方向性は、[...] 彼自身の階級的立場に求められるべきであろう。」これは彼の手法なのだ、とウシエヴィチは言う。「ザボロツキーがプロレタリアートの世界観や実践について喋っているとき、彼が自らの目的のために用いている手法は、子供じみた言葉遣いを真似た、瘋癲のふりをしている幼稚なやり方であり、正当化されぬ韻律の破壊である。」(Усиевич. 46)

それではこれとは対照的に、同じ世界観、現実認識でも、詩人が自らの思いを吐露するときはどうか。この点ウシエヴィチは、まず『ロデイニコフ』から同名の主人公の口を借りてザボロツキーが涙と共に語る次の部分に注目する。

В душе моей сраженье
Природы, зренья и науки.
Вокруг меня кричат собаки.
Растет в саду огромный мак, —
Я различаю только знаки
Домов, растений и собак.
Я тщетно вспоминаю детство,
Которое судило мне в наследство
Не мир живой, на тысячу ладов
Поющий, прыгающий, думающий, ясный,
Но мир испорченный сознанием отцов,
Искусственный, немой, и безобразный
И продолжающий день ото дня стареть ...
О, если бы хоть раз на землю посмотреть
И разорвать глаза и вырвать жилы!

(Заболоцкий Н.А. 1995. 309)

私の魂では、自然と、視覚と、
学問の戦い。
私の周りでは犬がほえている。
庭には巨大なケシが育ち、
私は家、植物、犬の
印だけを見分ける。
私はむなしく子供時代を思い出す。
その子供時代は、幾千の調和を歌い、
飛び跳ね、思惟し、輝く、生きた世界ではなく、
父たちの意識によって損なわれた世界、
人の手になる、喋れず、醜い世界、
日に日に追いつづけていく世界を
私に運命付けた。
ああ、せめて一度だけでも大地を見、
目を裂き、血管を引き抜けたなら！

一転してここでは、何のてらいも、気負いもない。伝統的ロシア詩と何の変わったところもない。「ザボロツキーが自らの感情と思惟を叙述しているふりをしている場合とは正反対に、ここでの世界観の特徴は正確に描かれ、何の奇行も、わざとらしい子供じみた言い回しも、正当化されえない韻律の違反もない。ここでは作者はふざけていない。ここではイメージに投影されているものに対してのふざけたアイロニーは感じられない。このように、仮面に隠されたかたちで、ザボロツキー自身の、本物の世界観と現実認識が反映されているわけである。」(Усиевич. 33)

『農業の勝利』に戻って、ウシエヴィチの引用に従おう。

Корова в формулах и лентах

Пекла пирог из элементов,

(1.131)

В хлеву природу пел осел,

Достигнув полного ума.

(Заболоцкий Н.А. 1995. 269)

Повсюду разные занятия:

Люди кучками сидят,

Эти — шьют большие платья,

Те — из трубочки дымят.

Один старик сидя в овраге,

Объясняет философию собаке,

Другой, также царь и бог

Земледельческих орудий,

У коровы щупал груди

И худые кости ног.

Потом тихо составляет

Идею точных молотилок

И коровам объясняет,

Сердцем радостен и пылок.

(Там же)

雌牛は公式とテープの中で

元素からケーキを焼き上げ

畜舎では、ロバが完全な知性を

手に入れ、自然を賞賛する。

至る所であらゆる仕事、

人々は群れをなして座り、

ある者は大きな洋服を縫い、

ある者は煙突に煙をとます。

一人の老人がくぼ地に座り、

犬に哲学を説く。

別の老人、農業の道具の

皇帝であり神が

雌牛の胸と痩せた足の骨を

手で触れて確かめる。

その後、精密脱穀機の

構想を静かに練り

雌牛たちに説明する。

心喜ばしく、また熱烈に。

この引用の後、著者は簡潔に述べている。「ほとんど何のコメントも必要ではない。」(Усиевич. 44)

以上の二点をまとめるとこうなる。「彼(ザボロツキー)が(プロレタリアートとは)

別の世界観について語るとき、美しく、メロディアスで、リズムカルで、何の奇行も瘋癲もない詩行」が現れる、と(Усиевич. 46)。

ウシエヴィチは上記の二つの傾向を、他にもいくつか例を引きながら裏付けている。彼女の結論はこうである。

ザボロツキー——あえて自らを複雑にし、一般読者には理解困難な、難解な詩人。[...] ザボロツキーの著作の危険性は、一方で彼の本物の技量と、彼が自らの悪意に満ちた傾向を隠すのに用いるフォルマリスト的な奇行が一連の若いソビエトの詩人達に影響を与えるからであり、また他方、彼が文学者層に自らの弟子と追随者を形成していることにある。これに対し我々は、彼が敵だということを暴き、彼の繊細かつ鋭敏な技量が何のためなのか、彼の様式化されたプリミティヴィズムと見せ掛けのナイーブさ、いたずらにもてあそばれる瘋癲の機能が何なのかを示すことによって、彼と戦わねばならない。(Усиевич. 47,48)

8

仮面は剥がされた。『詩柱』と『農業の勝利』が反ソビエト的、反革命的な性格と決め付けられ、反革命グループの一員という捏造された罪状¹により詩人が逮捕・流刑に処されるのは、それから6年後の1938年のことである。

文献一覧

第一次資料 (明記されていない限り、本論文のザボロツキーからの引用は以下による。巻数とページ数のみ示す。)

Заболоцкий Н.А. Собрание сочинений в 3-х томах. М.: Худож. лит., 1983.

参考文献

Воспоминания о Заболоцком. М.: Сов. писатель, 1977.

Гинзбург Л.Я. 1973. Заболоцкий двадцатых годов // Записные книжки. Воспоминания. Эссе. СПб.: Искусство-СПб., 2002. С.476-484.

Еткинд Е.Г. 1983. В поисках человека. Путь Николая Заболоцкого от неофутуризма к “поэзии

¹ レニングラード内務人民委員部 1940年5月5日付けの記録より。См. Заболоцкий Н.Н. 562-563.

- души”; 1985. Заболоцкий и Хлебников // Там, внутри. О русской поэзии XX века. СПб.: Изд-во Максима, 1996. С. 482-542.
- Заболоцкий Н.А. “Огонь, мерцающий в сосуде...”: Стихотворения и поэмы. Переводы. Письма и статьи. Жизнеописание. Воспоминания современников. Анализ творчества. М.: Педагогика-Пресс, 1995. (В том числе: Урбан А.А. 1979. Архитектура природы. С.862-887.)
- Заболоцкий Н.Н. Жизнь Н.А.Заболоцкого. М.: Согласие, 1998.
- Македонов А.В. Николай Заболоцкий: Жизнь, творчество, метаморфозы. Л.: Сов.писатель, 1968.
- Ростовцева И.И. Мир Заболоцкого. М.: Изд-во МГУ, 1999.
- Усиевич Е. 1933. Под маской юродства // Три статьи. М.: Журнально-газетное объединение, 1934. С.25-48.
- Goldstein, Darra. *Nikolai Zabolotsky: play for mortal stakes*. Cambridge: Cambridge University Press, 1993.
- Goldstein, Darra. *Nikolai Zabolotsky's utopian vision*. Washington, D.C.: The Wilson Center, Kennan Institute for Advanced Russian Studies, 1987.
- Goldstein, Darra. “Zabolockij and Ciolkovskij.” *Russian Literature* 13, no.1 (1983), pp.65-80.
- Maisin-Delic, Irene. “Zabolotsky`s The Triumph of Agriculture: Satire or Utopia?” *Russian Review* 42, no.4 (1983), pp. 360-376.
- Milner-Gulland, R.R. 1971. “Zabolotsky: Philosopher-Poet.” *Soviet Studies* 22, no.4 (1971), pp.595-608.
- Muchnic, Helen. “Three inner émigrés: Anna Akhmatova, Osip Mandelshtam, Nikolai Zabolotsky.” *Russian Review* 26, no.1 (1967), pp.13-25
- Pratt, Sarah. *Nikolai Zabolotsky: enigma and cultural paradigm*. Evanston, Ill.: Northwestern University Press, 2000.

Ирония и гротеск Заболоцкого

ИТО Томокадзу

Цель данной работы — определить характерные особенности начального периода творчества Н.А. Заболоцкого (1903-1958). В качестве объектов анализа использованы стихи “Красная Бавария”(1926) и поэма “Торжество земледелия” (1929-1930).

“Красная Бавария”—это первое стихотворение в сборнике Заболоцкого “Столбцы”, вышедшем в 1929 году. Как часто отмечают, особенности раннего периода творчества Заболоцкого состоит в использовании иронического тона и гротескности изображения. Эти особенности легко прослеживаются и в “Красной Баварии”. Однако важно понять, чем обусловлены эти характеристики. Как сказал о себе сам Заболоцкий в манифесте Обэриу, он— «поэт голых конкретных фигур, придвинутых вплотную к глазам зрителя». Как выразила, перефразируя это, Л. Гинзбург, Заболоцкий— поэт зрительный с «голыми глазами». Именно отсюда возникают пародийность и гротескный мир “Столбцов”. При этом важно отметить, что “Красная Бавария”— это своего рода словесная «жанровая картина» Невского проспекта в Петербурге нэповского времени. Эти творческие принципы обусловили предметность, материальность и конкретность восприятия обстоятельств самим Заболоцким.

В то время как “Столбцы” вышли в свет, Заболоцкий приступил к поэме “Торжество земледелия”. Поэма посвящена коллективизации сельского хозяйства Советского Союза. Для понимания пафоса этого произведения необходимо обратиться к трудно разрешимому вопросу о том, что поэт написал: гимн будущего социализма или свое представление о грядущей утопии, поскольку в этой поэме можно усмотреть оба эти элемента. Тут развивается, с одной стороны, сама натурфилософия поэта, на которую большое влияние оказали разные литераторы и философы, начиная с Гете и кончая Циолковским и Вернадским. Под их влиянием в “Торжестве земледелия” иллюстрируется утопия “субъективного идеализма”. С другой стороны, как ясно из биографии поэта и самой поэмы, Заболоцкий в той или иной степени сочувствовал советской политике коллективизации. По этому поводу в настоящей работе подробно рассматривается статья Е. Усиевич “Под маской юродства”(1933). Эта работа не ограничивается к политической оценкой. Через детальный анализ ритма, рифмы и выбора слов в этой поэме, Усиевич снимает «маску юродства» с поэта, и доказывает, что Заболоцкий не может искренне разделять позицию пролетариата.